



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 五島瑳智子さんの『理不尽な看護職の男女差別』を読んで：大阪の保健婦はこう考える                                             |
| Author(s)    | 出版編集室                                                                               |
| Citation     | 大阪公衆衛生. 1993, 63, p. 18-19                                                          |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/83840">https://hdl.handle.net/11094/83840</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## アンケート

五島瑛智子さんの

### 『理不尽な看護職の男女差別』を読んで

— 大阪の保健婦はこう考える —

出版編集室

2月2日の朝日新聞「論壇」に東邦大学医療短大の五島瑛智子学長の『理不尽な看護職の男女差別』という一文が掲載された。その中で『男子の看護師はたとえ専攻科で知識技術を修得しても保健士や助産士の国家試験を受けることができない。……高齢化社会を迎え、在宅医療をはじめとする地域看護が重視されている。こうした分野で働くためには保健士の資格が必要だが、この領域から男性をしめ出す理由はない』と述べられている。編集室でも話題になったので、早速大阪の保健婦さんたちにアンケートを取ってみた。さて読者の皆さんのご意見は？

● ● ● ● ●

私は助産婦の資格ももってるが、男性の助産士さんが誕生したらステキだと思う。なぜ男性の産科医師がいるのに助産士がいないのか不思議だ。職業を考える時に、女性・男性の特性を考慮するのは大切なこととは思いますが「人間の出生から死までのかわり」を考えると、それは決して女性だけの特性とは思えない。助産士・保健士の誕生を待ち望んでいる。  
(い・東大阪市・40代)

性別があるのがおかしい。ケースワーカーでも、男女同等で仕事をしている。男性が入ることで、保健業務の視野も広がり、受ける側にとっても良好なサービスが提供されると思う。  
(う・大阪府・20代)

男性の進出によって看護が広がり、向上して行くのは良いことだと思う。しかし、男女が同じ条件で働くには、女性はまだ不利な状況にあると思う。  
(う・堺市・30代)

意見に賛成。「看護」イコール「女性の仕事」というのはおかしい。専門的な知識を身につけて資格を持ち、人間を総合的に見ていくという立場であれば、性による差はないのではないだろうか。  
(お・大阪府・40代)

保健婦は、やはり女性の職業として残してほしいと思っていた。しかし考えてみると、保健所に実習に来ていた看護師志望の男子学生はとても熱心で、何の違和感もなく、女性の中で歓迎されているようだった。また、寝たきりの老人を訪問する中で、夫が妻を介護している場面に出会うことがあるが、男性の介護者から学ぶことも多い。それに、女性ばかりの集団に男性が入ることで、他の職種との関係も取りやすくなるとも思える。いろいろ考えているうちに、男性歓迎という気持ちになってきた。  
(く・東大阪市・40代)

看護にはデリケートな場面もあり、男性には不向きだという意見もある。しかし地域で生活する寝たきり老人への援助には、入浴介助など力仕事が必要な場合もある。また実際に介護者が夫であることも多いし、男同士でしか話し合えない相談内容もあると思う。将来は保・助・看の免許を一本化し、両性に門

戸を開いて、それぞれに適した役割の仕事をするのが一番いい。（く・大阪市・30代）

男性でも、しっかりした看護学を学べば十分に通用する。問題は、受け入れ側の先入観と、「看護」＝「ナース」＝「優しさ」という変な固定観念だと思う。また、正しい看護の教育のあり方を、短大や大学だけでなく、看護専門学校でも、もっと充実していくべきだ。（つ・堺市・30代）

私は「ぼくが女だったら、絶対に保健婦になるために進学する」という男の人の意見を聞き、保健婦学校に進学した。女性ばかりで、会議やケース展開などに行きづまるようなとき、男性の視野が加わるのは良いことではないかと思う。（な・堺市・20代）

助産婦には疑問があるが、看護婦、保健婦にはどんどん広げてほしい。看護業務の多様化の中で、女性だけでは体力的にも限界がある。ぜひ一緒にやって行きたい。（な・大阪府・40代）

男女差別ということではなく、それぞれの仕事には適性があると思う。門戸を広げるとは良いが、性別によってそれぞれの長所があり、それを生かせる仕事がある。それは男女差別という問題とは違うのではないか。（ひ・堺市・40代）

意見に賛成だが、業務の中には助産婦の乳房管理や母性の指導など、受ける側が望まない場合もあるかもしれない。欧米では産婦の希望で医師を選ぶというが、日本でも、受ける側が選択できる体制を、同時に作っていかなければならない。（ふ・大阪府・30代）

一読して「確かにそうだ」と思ったが、どうも100パーセント共感できない。この引っ

掛かりは何だろう？ 一体、保健婦とは何だろう？ いろいろな人に出会えば出会うほど考え込んでしまう。教科書的な定義はあるとしても、実際はもっと奥深い仕事だ。日常に生じる問題を家庭の中に多少踏み入って共に考える、割り切りの困難な、もやもやした職種であるようだ。それはほとんど「女性の特徴」と近いものがあるのではないだろうか？

男性の進出を拒否するのではない。しかし現時点では、保健婦業務は女性のほうが望ましい。女性の特権として残しておきたいような気がする。（や・東大阪市・20代）

職業として、男子の進出には何ら問題はない。しかし保健所で言うならば、女性集団であることプラス保健婦の体質みたいなものがある。地味で、そのうえ個人に任されることが多い、わかりにくい地区看護活動…。「保健婦って何？」と聞かれてもうまく説明できない。長年つきあわないと分ってもらえない。それを男性がするといっても、むこうから願い下げということになるかも…。でもこの問題、私自身が知らないため（看護師と一緒に仕事をすることがない！）の偏見なのかなあ…。（や・東大阪市・30代）

今の制度は男性差別だというのが論者の意見だが、では、それは誰がどういう趣旨でつくったものか考えてもらいたい。「看護や介助は女の仕事」という役割分担の考え方に基づいて男性がつくったものではないか。その意味から、この問題の裏には、まさしく女性差別が存在する。しかし今、地域看護の仕事から男性を排除する理由は全くないと思う。逆に、そういった領域には男性が進出することによって、地域社会のなかに「看護・介護も男女協同で」という意識が定着していくのではないだろうか。（よ・大阪市・30代）